

# 佐久考古通信

発行：2020. 4.20 佐久考古学会  
小浜市御影新田 1945-6 桜井秀雄 氏  
今号の編集担当 桜井秀雄 氏  
今号の編集協力 堤 隆 氏

道跡と考古学を学ぶためのコミュニケーション誌：長野県佐久地域における考古道跡・遺物からのアプローチ

## 特集 佐久地方の馬文化

佐久の古代社会において馬が果たした役割は大きい。馬に関係する考古資料の逸品や馬の墓、野馬除跡という全国的にも貴重な遺構も残っている。今回はこうした馬をテーマにした特集号である。



北西の久保古墳の馬型埴輪



東一本柳古墳出土の馬具

写真提供：佐久市教育委員会

弥生時代後期の佐久平北部には、長さ約18m、面積約153㎡という日本最大級の超大型竪穴建物跡が発見された西近津遺跡群をはじめとして大規模集落が集中していた。ところが古墳時代にはいると、遺跡の規模も数も激減し、小規模な集落が広い範囲に点在するにすぎなくなる。これは標高700mを越える佐久平北部においてこの時期に起きた気候の冷涼化により作物の生産力が著しく低下したことが最大の要因であったとみられる。

こうした状況が古墳時代後期になると一変する。佐久平北部には6世紀中頃から再び集落が増えはじめ、奈良・平安時代の8～9世紀には、信濃国でも有数な大規模集落が密集する地域となった。出土遺物も豊富となり、その繁栄ぶりには目を見張るものがある。

このように、長い低迷期を脱することができたのはこの地域の気候・風土に適した「牧」の設置による馬の生産という新規産業によるところが大きかったと考えられる。

馬は5世紀には大陸から移入され、軍事や交通などに大きな変革を与えた。佐久の古墳からも馬具の逸品や馬型埴輪など馬に関わる遺物が出土する。奈良・平安時代には佐久には御牧が3箇所に設けられた。望月牧、塩野牧、長倉牧である。また、東山道の清水駅と長倉駅では駅馬が置かれていた。馬をなくして佐久の古代は語れないともいえる。

今回は、佐久の古墳時代と奈良・平安時代における馬に関わる遺物や遺構を3名の会員が紹介する。

### ★ CONTENTS

- 佐久地域の古墳出土馬具……………富沢一明・2
- 北西の久保古墳出土の馬型埴輪……………富沢一明・4
- 馬歯・轡の出土と供献儀礼の推定例……………堤 隆・5
- 野火付遺跡の埋葬馬……………堤 隆・6
- 御牧ヶ原の野馬除跡……………桜井秀雄・7
- 奈良・平安時代の馬鈴・焼印……………桜井秀雄・8

## 佐久地域の古墳出土馬具

富沢一明

現在までに佐久地域の馬具が出土している古墳は39基が数えられる。しかし、出土した時代が古く、詳細な資料内容を把握できないものも多い。

出土地点は地域的な片寄りが顕著であり、旧望月町や旧浅科村、佐久市塚原付近、もう一つまとまりとして小諸市や御代田町の浅間山麓があげられる。南佐久は分布が非常に希薄であり、特に旧白田町以南は今のところ出土例がない。このことは後に成立する「望月牧」や「塩野牧」との関連が推測される。

出土している馬具は轡、杏葉、雲珠、辻金具、帯金具、鞍金具等があるが、一つの古墳出土で全ての揃いを出土した古墳はない。このような中で馬具のセットとして認識できる古墳は山の神3号墳と東一本柳古墳である。

特に東一本柳古墳の馬具類は金銅製の杏葉をはじめとして金銅製の辻金具が豊富に出土し、轡も鉄地金銅張りの変形心葉形鏡板付轡である。当地域内の轡が素環の造りの轡が殆どであるのに対し異彩を放っている。

地域内出土の馬具で時期を確定できるものは少なく、代表的な東一本柳古墳出土馬具が7世紀前半、山の神3号古墳の馬具が6世紀後半代と考えられ、これらの事が当地域内への馬具の導入は古墳後期と考えられる。ただ、今回集落址内出土の馬具を集成しなかった為、今後導入時期や分布は見直される可能性があるが、大きな変更はないと考える。

伊那谷等での5世紀代の馬具の導入(=馬の導入)に比べると、佐久地域での馬具の導入は遅い。しかし、その後の御牧の発展は他地域に勝るとも劣らない状況である。例えば佐久地域における馬の育成環境が良好であったとか、優れた馬飼いが存在したなどその発展の理由を探る必要があろう。

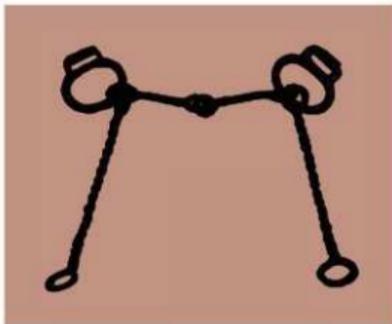


図1 御代田町めがね塚1号墳の馬具

表1 佐久地域出土の馬具一覧

No	地区名		古墳名	馬具類
1	立科	神河	正明寺古墳	轡・雲珠
2		塩沢	火の雨塚古墳	馬具
3	佐久(望月)	赤洗	御沢3号墳	馬具
4		茂田井	七ノ雨塚古墳	馬具
5		春日	金塚古墳群	馬具
6		塩和	大塚第3号墳	轡・金銅製雲珠・辻金具
7			下高尾7号墳	馬具
8			山の神古墳群1号墳	轡4
9			山の神古墳群3号墳	轡1・雲珠・辻金具・帯り金具・鞍具
10			山の神古墳群4号墳	轡・鞍具
11	佐久(浅科)	御馬青	上平の塚古墳	馬具
12		甲	土合古墳群1号墳	轡
13		桑山	近久保古墳	轡
14	佐久	塚原	赤塚1号墳	轡・雲珠
15			藤塚古墳群9号墳	鞍具・帯り金具
16			下大豆塚古墳	轡?
17		岩村田	東一本柳古墳	轡・金銅製杏葉他
18			北西の久保古墳2号墳	帯り金具?
19			北西の久保古墳13号墳	鞍具
20		安原	蛇塚古墳群1号墳	轡・雲珠
21			蛇塚古墳群3号墳	鞍金具
22		平塚	からむし1号墳	馬具(金銅製杏葉の可能性)
23		柳塚	ウバ塚古墳	馬具
24			西東山古墳	馬具
25		野元	畑田古墳	轡
26		大沢	小学校跡地古墳	馬具
27		内山	長塚古墳群7号墳	轡
28	御代田	塩野	塚田古墳群4号墳	轡
29		風瀬口	めがね塚1号古墳	轡
30	小諸	越前町	第2号墳	馬具
31			第9号墳	馬具
32		与良	与良沢古墳	轡3・鞍具・留金具2
33		立原	立原1号墳	馬具
34		加増中村	加増古墳群4号墳	馬具
35			加増古墳群6号墳	杏葉・雲珠
36			加増古墳群16号墳	馬具
37			加増古墳群17号墳	轡
38	甲斐下	塚下	塚下6号墳	轡
39		宮の前	宮の前古墳	馬具

県学芸誌74号塩入氏論文に加筆。馬具のみの記載は図・写真が不明

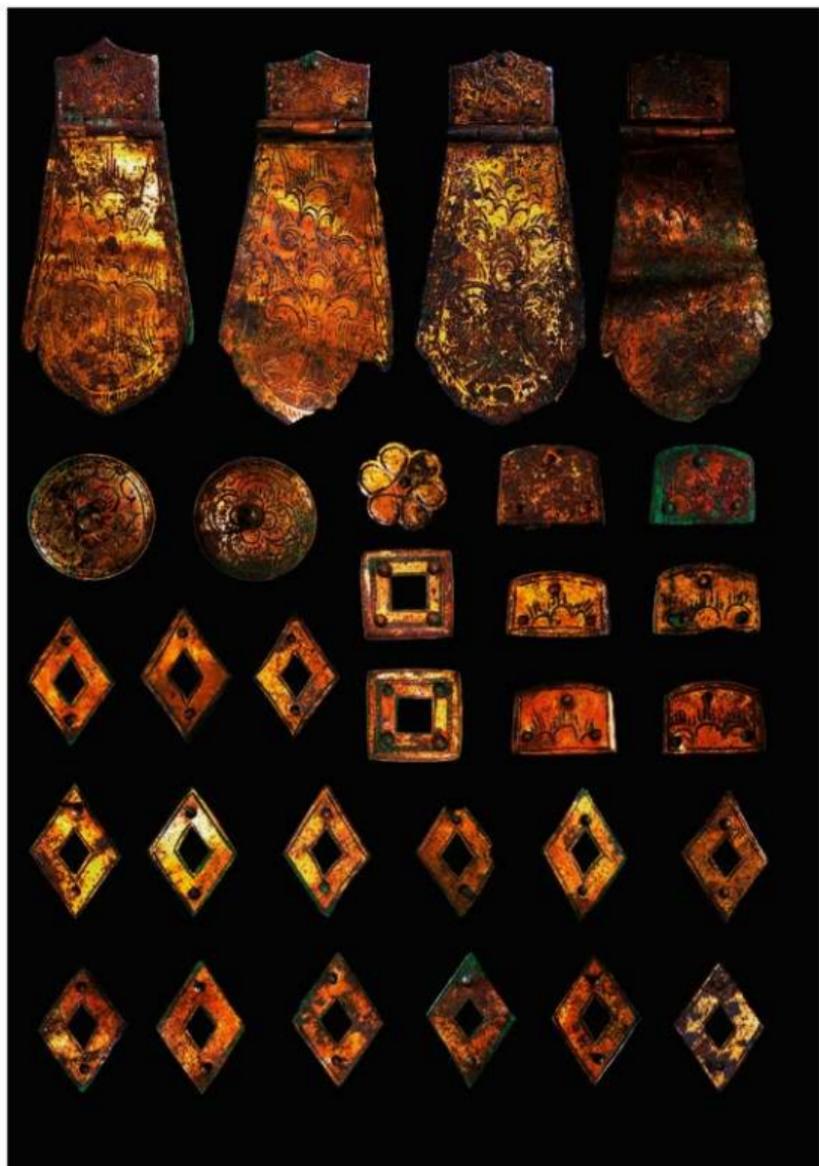


図2 東一本柳古墳出土の馬具

写真提供：北九州教育委員会



## 北西の久保古墳出土 馬型埴輪

富沢一明

馬型埴輪は、当時の信州短期大学建設の折に北西の久保古墳より出土した。

古墳は、佐久市岩村田の湯川に飛び出した舌状の台地上に立地し、方墳を中心とする5世紀代の古墳10基と埴輪を出土した6世紀代に位置づけられる1基の円墳、7世紀後半代と考えられる4基の円墳からなる古墳群である。

多くの円筒埴輪とともに形象埴輪を出土した17号墳は直径24mほどの円墳で、すでに墳丘は削平されており、浅い周溝のみが検出された。埴輪片は主にこの周溝内の墳丘側より出土し、墳丘に樹立されていたものが崩落し埋没したと考えられる出土状態であった。埴輪の種類は円筒・朝顔形埴輪、形象埴輪として家・盾・ゆき・馬・鳥・鹿・太刀があり、人物埴輪としては

鈴鏡を腰に下げた女性像や帽子を被る像、みずらの男性像などがある。また、小さな鳥形の部品もあることから鷹匠も存在した可能性がある。

今回紹介する馬型埴輪は3頭が復元されている。飾り馬2頭、裸馬1頭である。これら3頭はいずれも脚や胸部、鬣の造りは同一であるが、飾り馬は馬具装飾に違いがあり、大きく異なるのは胸の馬鈴と馬鐸である。いずれの飾り馬も欠損部が多く不確定な部分もあるが、f字形鏡板轡、鞍金具、銜銜、尻金具として雲珠が表現されている。また、帯の縁は赤彩が施されている。裸馬は頭部が殆ど欠損している為、形状は解らないが背中にかけて1本の手綱が表現されている事から轡を装着していると予想できる。また、腹部に乳房の表現があることから雌馬の可能性が指摘できる。これら馬型埴輪の時期は、群馬県の資料と比較した場合、轡の形状などから6世紀前半に位置づけられると考えるが、同時に出土した円筒埴輪の形態からは6世紀後半という時期も導き出されており、古墳全体の築造時期は全体の出土遺物から再考が必要であろう。

以上のように北西の久保古墳の馬型埴輪は欠損部が多い事から細部の形状は把握できない部分も多いが、県内では唯一のまとまった資料であり貴重な存在である。

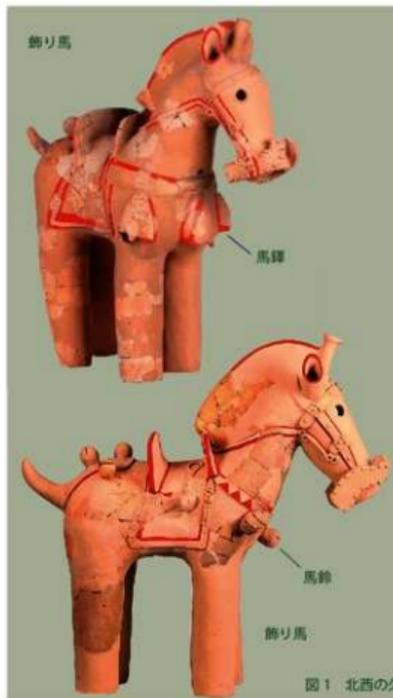


図1 北西の久保古墳の馬型埴輪

写真提供：佐久市教育委員会

## 馬歯・轡の出土と供献儀礼の推定例

- 御代田町塚田古墳群 K-4 号墳の事例から -

堤 隆



浅間山南麓御代田町塩野の塚田古墳群は、1992年に発掘された。このうち径14mを測るK-4号墳は墳丘は削片され、石室は残されていなかったが、周溝からは馬歯列と轡が若干離れて出土した。馬は、10歳前後のもので、体高が125cm前後の小ぶりな中型馬と推定された。古墳は7世紀前半に位置づけられ、当地方の古墳時代後期における馬のあり方を示す具体例といえる。

福岡大学の桃崎祐輔氏によれば、K-4号墳のあり方は馬具を装着した状態で馬を殺し、頭部を切断して古墳に供献した儀礼と推定されるという。さらには、轡を伴い馬の年齢が騎馬の引退年齢に近いことを考えれば、来世においても古墳の被葬者に奉仕するべく殉殺され、かねて老齢馬の廃棄といった意味合いも持ち合わせていたのではないかと（桃崎祐輔1994「K-4号古墳周溝出土の馬歯・轡とその意義」『塚田遺跡』御代田町教育委員会編）。

古墳被葬者と馬との関連性、殉殺祭祀、8世紀の御牧へと続く馬の存在性などの問題を含め、重要な事例といえる。



図2 K-4号墳出土馬具



図3 馬具と馬歯の出土状態



図1 塚田古墳群 K-4号墳周溝

## 野火付遺跡の埋葬馬

堤 隆

昭和59(1984)年、御代田町鑄物師遺跡群野火付遺跡の発掘調査によって5頭の埋蔵馬が検出された。これらの馬は1頭・1頭、丁寧に土坑に埋葬されたもので、共存した土器類から9世紀初頭のものであることがわかった。

1号馬は、性別不明で年齢は10歳。2号馬は、メスで年齢は4歳。3号馬は、メスで年齢は20歳以上の老齢馬。4号馬は、メスで年齢は10歳。5号馬は、臼歯点のみで、年齢・性別は不明であった。また、4号馬の体高は、130.5センチ前後で、現在の木曾駒より幾分小さい程度の中型馬らしい。

遺跡のある浅間山南麓は、8世紀から9世紀にかけての奈良・平安時代には、官道の東山道が通過し、15頭の駅馬とともに長倉駅が置かれた。実際、野火付遺跡に近接する小諸市宮ノ反A遺跡から検出された建物群と側溝跡は、長倉駅や東山道の道そのものである可能性がある。

また、この地域は、佐久郡内に置かれた御牧のうち、望月牧をのぞく2牧、すなわち塩野牧と長倉牧があった地域である。馬の飼育数はわからないが、例年の朝

廷献上を考えると、50から100頭前後は飼育されていたことが想起される。

したがって、これら5頭の馬が、東山道長倉駅や、御牧である塩野牧あるいは長倉牧で飼育されていた馬であることは想像に難くない。また、鑄物師遺跡群全体では、35頭分もの馬骨が出土し、馬との深い関係を物語っている。

鑄物師屋遺跡群を、御牧経営のための集落であるとしたのは坪井清足氏である。この地域では、奈良・平安時代の竪穴住居や掘立柱建物が何百と発掘されており、馬を飼育する人々が居住したムラではないかといひ、掘立柱建物を厩舎と推定している。



図2 野火付遺跡4号馬 (10歳 メス)



図1 野火付遺跡の埋葬馬 (2号馬 4歳、メス)



奈良・平安時代には勅使牧(御牧)が全国に置かれ、朝廷へ献上する馬の生産を行っていた。信濃国には16の牧が、佐久には3つの牧が置かれた。望月牧、塩野牧、長倉牧である。このうち望月牧は、佐久市、小諸市、東御市(旧北御牧村)にまたがる御牧ヶ原台地帯に置かれていた。牧に適した高燥な土地であり、台地そのものが天然の囲いとなっている。そして、この御牧ヶ原台地には現在も所々に土手状の高まりが残っているが、これが野馬除の跡である。

野馬除は、放牧している馬が逃げないように牧の周囲に溝を掘り、掘り上げた土を土手状に盛り上げて築いた土堤である。土堤の上には木の柵(格)を巡らせたものとみられる。

御牧ヶ原台地には10箇所を越える野馬除跡が確認されている。このうち佐久市の旧浅科村分と東御市(旧北御牧村)分では残りの良好な部分がそれぞれ市史跡に指定されている。

写真は東御市分の池久保地点である。保存状態が大変良く、野馬除跡の土堤と溝の姿がよくわかる。

土堤の築造年代は決定が困難な面があるが、おそらくは牧の最盛期である平安時代を中心とした可能性が高いとみられる。また、史料に記載を残すように中世まで引き継がれるものもあるかもしれない。

旧北御牧村教育委員会では野馬除跡の調査を幾次にわたって行っており、そのうち大原地点の発掘調査の成果によれば、溝の上端幅は約3.4m、断面はU字状で底部幅約1.5mを測り、溝の両側には約0.3~0.5mの盛土がなされて深さは約1.5mに及ぶことなどが判明している(北御牧村教委2000「望月牧野馬除跡大原地点一緊急発掘報告書一」)。



図2 野馬除土堤 撮影：桜井秀雄

望月牧は、毎年20頭を献上する信濃国16牧最大の御牧であった。信濃国16牧で80頭であるため、実にその4分の1が望月牧ということになる。しかも他の15牧は全体で60頭になればよかったのに対し、望月牧は毎年20頭を必ず献上しなければならなかったという。そのため御牧を管理する牧監も信濃国のみ定員2名で、うち1名は望月牧の専任であった。望月牧がどれだけ重要視されていたかがわかる。

紀貫之が「相坂の関の清水にかけみえていまや引くらん望月の牧」(拾遺和歌集)と歌ったように名馬の産地として名高い存在であり、「望月の牧」は駒牽の歌枕にもなっていた。この駒牽とは、全国の御牧から決められた数の牧馬を天皇の御覧にいれる行事であるが、望月牧のみが毎年8月23日であり、他牧の8月15日と異なるのも大きな相違である。全国の御牧のなかでも特別な存在であることがここからも理解できよう。

野馬除跡は御代田町の塩野山遺跡でも確認されており、軽井沢町内にも可能性が指摘される土堤がみられている。このように塩野牧や長倉牧でも野馬除が存在していたことが知られる。

中でも今も良好な姿を多く残す望月牧の野馬除跡は全国的にも貴重なものでありより一層の保存と活用が求められよう。



図1 御牧原の野馬除跡 撮影：桜井秀雄

## 奈良・平安時代の馬鈴・焼印

桜井秀雄

佐久市長土呂の聖原遺跡は、818軒の住居跡、869棟の掘立建物跡等が見つかった奈良・平安時代を中心とした佐久平北部を代表する大集落遺跡である。現在は市流通業務団地となっている場所である。この遺跡から出土している馬鈴と焼印について紹介したい。

## ① 馬鈴

馬の胸に下げたり、胸繫、面繫、尻繫に飾ったりした金属製の鈴である。本資料は8世紀第2四半期のH499号住居址から出土した青銅製のもので、残存長4.7cm、最大幅4.4cm、器高(厚)4.4cm、重量77.7gをはかる。馬鈴には本資料のような球形の他に楕円形のものもある。吊手部分は欠損するが球形部分の残りは大変良好である。

この他、佐久地域では御代田町の広畑遺跡からも馬鈴とみられる青銅製の鈴が出土している。

## ② 焼印

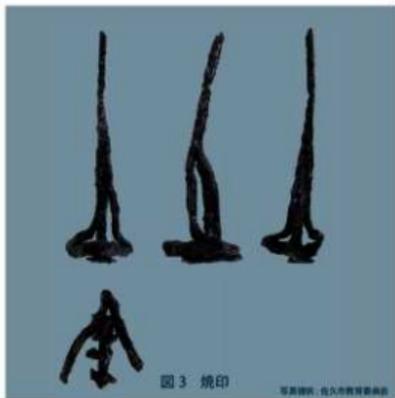
9世紀前半のH439号住居址から「金」と記された焼印状鉄製品が出土している。最大長15.3cm、最大幅15.3cm、最大幅5.2cm、器高(厚)5.2cm、重量68.0gをはかる。比較的小型のものであるため、木箱などに押



図2 馬具の装着図

したものである可能性もあるが、本資料が「金氏の所有」を表わしていることは間違いない。馬は5世紀に大陸から渡ってきた新来の動物であり、馬の生産や取り扱いには渡来系の人々の技術が必要であったことは言うまでもない。馬と密接な関係を持つ渡来系の集団が佐久にいたことを示してくれる資料である。

なお、聖原遺跡では8世紀第II四半期のH355号住居址から甕も出土している。



## ■ 編集後記

本号では佐久の古代社会の中で大きな位置を占めた「馬」の特集を組みました。古墳時代では馬具と馬型埴輪を、奈良・平安時代では馬の墓と野馬鈴跡、それに馬鈴、焼印という佐久の馬に係わる考古資料の代表例を取り上げることができたかと思えます。また、今後の研究の基礎となる古墳出土馬具の集積も富沢会員によりまとめてもらうことができました。

これを契機に佐久の「馬」について、さらに注目していただければ幸いです。

(桜井秀雄)